

上代語の「見ユ」とその活用の展開 －活用形と助動詞との接続を中心に－

On the Conjugation of Ancient Japanese *miyu* and its Conjunction with Auxiliary Verbs.

李 長波

要 旨

本稿は、上代歌謡と万葉集の「見ユ」の用例の分析を通して、一、「見ユ」と一人称との関連、二、上代語における「動詞・助動詞終止形＋見ユ」の形式と「見ユ」の意味、三、「見ユ」の活用形の展開と助動詞への接続の文法史的な意味を考察した。主な結論は、以下のとおりである。一、佐竹昭広（1975）が指摘した「上代人の自己中心係数」は、上代歌謡と前期万葉において特に顕著なものであり、万葉集の中でも、万葉第三期、第四期と時期が降るにつれてすでに次第に低下していく傾向が見られた。これは文体史的な問題とともに文法史的な問題であると考えられる。二、上代語における「動詞・助動詞終止形＋見ユ」の形式は特に上代歌謡に顕著な特徴であるが、万葉集を第一期、第二期、第三期、第四期に分けてみた場合、その用例が次第に減少していくのに平行して、「見ユ」の活用形、特に連用形を中心に助詞・助動詞が下接する用法が増えていく傾向が見られた。上代語の「見ユ」は視覚的にも物が存在する意、すなわち「現前の視覚事実＝事態」を表す動詞であり、その終止形終止法は現在を表すものと考えられる。三、「見ユ」連用形に下接する助動詞のうち、いわゆる「過去」の助動詞では「キ」が、いわゆる完了の助動詞では「ツ」が先行し、「ケリ」と「ヌ」はいずれも第四期において初めて用いられ、これは上代語の資料を一つの共時態として見るよりは、上代歌謡→前期万葉（万葉第一期、第二期）→後期万葉（万葉第三期、第四期）に分けて考えたほうが文体史的にも文法史的にも有効であり、「キ・ケリ」、「ツ・ヌ」の意味機能を考える上で唆を与えると考えられる。「見ユ」連用形に下接する動詞、助動詞に見る空間的・時間的な「近 vs. 非近」は話者への空間的、心理的な関係性として、上代語の人称体系、「一人称 vs. 非一人称」との相関を窺わせる。

キーワード

日本語 上代語 見ユ 活用形 助動詞の相互承接 「近 vs. 非近」

1 はじめに

万葉集の「見ユ」については、佐竹昭広（1964）によってつとにその用法が特殊であることが指摘されている。

万葉集をひもどいて、われわれがただちに気づくことは、「見ゆ」ということばの使用がきわだって多いという事実である。ただに「見ユ」の使用例が多いというばかりではない。「見ゆ」はその用法においても、しばしば極めて特徴的なかたちをとっている。それは、

さ夜中と夜はふけぬらし雁が音の聞こゆる空に月渡る見ゆ（9・一七〇一）¹

のように、終止形「見ゆ」で文を結ぶ用法である。古今集に入ると、この用法ははやくも姿を消し、ただ一例、万葉一七〇一の歌を収載するにすぎない。「見ゆ」で文を結ぶ形式が、いかに古代和歌独自の類型であったかということに対する、これは有力な裏づけとなる。（佐竹 1964：7-8 頁）（中略）

この際、見のがすことのできない、一群の用例は、万葉集三〇余にのぼる、前掲、

海人をとめ玉求むらし沖つ波かしこき海に舟出せり見ゆ（6・一〇〇三）

白たへの衣の袖をまくらがよ海人漕ぎ来見ゆ波立つなゆめ（14・三四四九）

の形式である。これらは、作用性名詞句を主部に持つ複文であるにもかかわらず、述部が「見ゆ」という動詞になっている。一見して例外かとも思われる「見ゆ」の使用法は、実は「見ゆ」の性質が作用性用言ではないこと、形状性用言であることをわれわれに指し示す。石垣氏も述べている通り、「見ゆ」は「聞ゆ」「思ほゆ」とともに、「見」、「聞き」、「思う」主体の判断に関する語であるがゆえに、その意味は動作的でなく状态的であり、形状性用言として考えるべきもののなのである²。（佐竹 1964：pp.9-10.）

佐竹昭広（1964）のこの指摘は、さらに佐竹昭広（1975）において次のように展開されている。

おもうに、『万葉集』にける「われ」の頻用は、かれらの自己中心性係数の高さを暗示するものであった。ということは、かれらが、すべての対象を自己との関係において主体的に把握するところの持ち主だったことを意味する。「見ゆ」とか「思ほゆ」とか、「われ」の対象把握に関する語の使用が、『万葉集』にきわだって多いという事実も、かれらの自己中心性の徴証として理解できることだ。「見ゆ」や「思ほゆ」の用法が『古今集』以後、衰亡の一路を辿ってゆく現象と自己中心性係数の低下現象とは、たぶん密接なかわりがあるとおもわれる。

上代語の「見ユ」とその活用の展開－活用形と助動詞との接続を中心に－（李 長波）

「見ゆ」は、終始「われ」を離れることのないことばである。「見ゆ」とは、誰に見えるのもない、ただ「われ」に「見える」ことなのである。

妹があたり今そ我が行く目のみだに我に見えこそ言問はずとも（7・一二一）

国遠み直には逢はず夢にだに我に見えこそ逢はむ日までに（12・三一二）

かれらは、外部世界に存在するものをすべて「われ」に「見える」ものとして受け止めた。万葉の外景は、したがって、多くのばあい「われ」に「見える」ものとして把握された。たとえ「見ゆ」の語を用いなくても、「見ゆ」というところで把握していると考えられる。（佐竹昭広 1975：480 頁）

以上の引用から分かるように、上代語の「見ユ」の特殊な用法は、一は、「見ユ」が直接、動詞・助動詞の終止形を承けるということ、二は、終止形「見ユ」で文を結ぶということ、三は、「見ユ」を含む動詞文の主語は形式的には視覚的対象であるが、その文には常に「我に」を含む、つまり一人称的表現であること、の三つに要約することができる。

本稿は、佐竹昭広（1964）、佐竹昭広（1975）を踏まえて、上代歌謡と万葉集の「見ユ」の用例の分析を通して、上代語における「動詞・助動詞終止形＋見ユ（終止法）」という形式と「見ユ」の意味、「見ユ」の活用形の展開に伴い、助動詞への接続による意味的分出³の持つ文法史的な意義を考察してみる。

2 上代語の「見ユ」の用法と意味

2.1 「見ユ」と「我」

上代語の「見ユ」は、二段動詞「見」に自発・受身の接尾辞もしくは助動詞といわれる「ゆ」がついてできた語であり、その意味は、一般に、①「視覚的にものが存在する」、②「見られる」、③「～の様子がある」という三つの用法が挙げられる（『時代別国語大辞典 上代編』を参照）。とすれば、視覚的に存在する対象を形式的な「主語」としても、「見ユ」を含む動詞文の表す文内容の実質的な「主語」が一人称の「我」に限定されることの必然性はどこにあるのか、がまず問われなければならない。これについては、すでに佐竹昭広（1975）によって上代人の「自己中心性係数の高さ」という解釈が与えられているが、本節はこの佐竹昭広（1975）の説を検証してみる。

万葉集の「見ユ」の用例を調べてみると、「見ユ」を含む動詞文の中に意味的に「我に」が含まれる例⁴が圧倒的に多いのに対し、「人に」と「見ユ」が共起する例は、以下の二例見られる。

①物思ふと人には見えじ〔比等尔波美要綱〕下紐の下ゆ恋ふるに月そ経にける（三七〇八）
安倍繼麻呂（天平八年：736）

- ②物思ふと人に見えじと〔人尔不所見常〕なまじひに常に思へりありそかねつる (0613) 山口女王 (天平年次未詳: 729-748 年)

例①、②の二例を除けば、佐竹昭広 (1964)、佐竹昭広 (1975) の説はだいたい認めてよさそうである。とすれば、万葉集の「見ユ」の全用例中、「見ユ」ないしは「見え + 助詞・助動詞」の全用例数 76 例、否定の「ず」を下接させる全用例 38 例に対して、わずか二例の違例となる⁵。しかも、この二例はいずれも万葉第四期、精確には天平年間のものに限ることは、それまでの「見ユ」の用法の大勢は、佐竹昭広 (1975) の指摘するとおり、上代人の「自己中心係数の高さ」を指し示すものと見てよい。

しかし、この二例の「見ユ」の意味については、果たして佐竹昭広・小島憲之・木下正俊校注『万葉集』一 (小学館、1975 年) の注釈のように、「人に見えじと——人に見られないようにしようと思って。見ユは見えるの意だが、相手に見せると解したほうがよい場合もある。ここはその例。」(342 頁) としてよいのかどうか、検討の余地があるようである。「見ユ」の「ゆ」は自発・受身などの意味を持つ接尾辞ないし助動詞と言われるが、その「自発・受身」の意味にさらに「使役」の意味を認めることは果たして妥当かどうか、という問題があるからである。

万葉集の下二段動詞に、使役的な意味に用いられる場合と受身的な意味に用いられる場合があることは、次の下二段活用の「知る」の例に徴して明らかである。

- ③我が思ひを人に知るれや〔人尔令知哉〕玉くしげ開き明けつと夢にし見ゆる (0591)
④春の野にあさる雉のつま恋に己があたりを人に知れつつ〔人尔令知管〕(1446)

例③、④は四段活用の「知る」に対する使役形として、「当事者が積極的に知らせる意図を持つ場合には使役的な意になるが、同時にそれは相手に知られる受身の意にもなりうる。当事者が知られまいとする意図を持っている場合には、この受身の意が表面化することになる。」といわれる (『時代別国語大辞典上代編』)。しかし、こと「見ユ」に関して言うのであれば、「ゆ」の意味がそもそも「自発・受身」と「使役」との関係は四段活用の「知る」と下二段活用の「知る」ほど自明ではない。「使役・受身」の意味を共存させるためには接尾辞、または助動詞とも言われる「ゆ」があまりにも「自発・受身」の意味に偏っているからである。推量の助動詞「ム」の否定とされる助動詞「じ」の用例にだけこのような解釈が許されること自体、佐竹・小島・木下 (1975) の解釈は、「見ユ」そのものの意味ではなく、「人に見えじ」という形式によって保証されるかぎりの解釈であり、要するに文脈的な意味を、「見え」に見いだしたのではないかと思われる⁶。とすれば、例①、②の「人に見えじ」は、いずれも「人に見られまい」(この「まい」も「否定的意志」ではなく、「否定推量」) と見てよさそうである。下二段活用の「知る」と同じ下二段活用の「見ユ」を同日に語れないゆえんもここにある。このように、例①、

②を、佐竹・小島・木下（1975）のように解釈しても、仮に筆者のように解釈しても、「人に」が「見ユ」の主体である限り、他の「見ユ」がすべて話者が主体である例に対して違例となる。

しかし、例①、②の意義はこれだけにとどまらないようである。このような用例が万葉第四期に現れることは、ただ単にこのような用法が万葉第四期になってはじめて可能となったとは考え難い。それは、「ゆ」の「受身」の意味からして、「見ユ」が一語として確立したそのときから、すでに文法的な可能性として、「我に見ゆ」、「人に見ゆ」という二つの用法があり得たと考えられるからである。「我に」を含む「見ユ」の用法が先行し、後に「人に見ゆ」の用法が現れるという事実は、その間に、「見ユ」の用法の史的な推移があったことが予想される。これを、佐竹昭広（1975）の指摘のとおり、広い意味での文体の問題として、「上代人の自己中心係数」が古今集にいたって相当低下していたとすれば、前期万葉から後期万葉、とりわけ万葉第四期になって初めて登場することの意味するところは、同じ万葉集の中でも、万葉人の「自己中心係数」の低下が見られることではないかと考えられる。

以上のように、「見ユ」の主体がもっぱら「我に」であった時期から、「人に」も用いられるようになる時期との間に史的な変化があったとすれば、一般に認められる、上代歌謡と万葉集の歴史的な前後関係もさることながら、同じ万葉集にあっても、第一期、第二期、第三期、第四期との間に文学的に歌風の変化や文体の変化が認められるのと同じように、文法史的な変化を見ることもできることが予想される。

2.2 上代語の「見ユ」の接続形式と活用形の消長

上代歌謡と万葉集を「見ユ」の用法を通して見てみると、佐竹昭広（1964）が万葉集について指摘された、一、「見ユ」が直接、動詞・助動詞の終止形を承けること、二、終止形「見ユ」で文を結ぶ、という二つの特徴は、万葉集よりも上代歌謡においてもっとも顕著なようである。すなわち、上代歌謡に9例用いられる「見ユ」のうち、否定の助動詞「ず」を下接させる2例を除く他の「見ユ」7例はすべて終止形終止法に用いられ、その形式も、以下のA「動詞・助動詞の終止形＋見ユ（終止形終止法）」3例、B「対象（も）＋見ユ（終止形終止法）」4例、の二つに限られる。

〔上代歌謡〕【見ゆ】7例

A「動詞・助動詞の終止形＋見ユ（終止形終止法）」3例（例⑤）

B「対象（も）＋見ユ（終止形終止法）」4例（例⑥）

⑤潮瀬の 波折を見れば 遊び来る 鮪が鰭手に 妻立てり見ゆ（記歌謡・108）

⑥千葉の 葛野を見れば 百千足る 家庭も見ゆ 国の秀も見ゆ（記歌謡・42）

そして、「見ユ」全7例に対し、A「動詞・助動詞終止形+見ユ（終止形終止法）」3例、B「対象（も）+見ユ（終止形終止法）」4例という、比率も、万葉集のどの時期よりも高いことは表1の示すとおりである。

【表1】上代語における「見ユ」終止形終止法と活用形の消長

資料 活用形	上代歌謡 (7)	万葉第一期 (2)	万葉第二期 (36)	万葉第三期 (20+12)	万葉第四期 (48+39)	年代未詳歌 (12+37)
終止形終止法A 比率	3 42.9%	0 0%	9 25%	5+4 28.1%	6 6.9%	4(第三期) 8.2%
終止形終止法Bその他 A+Bの比率	4 100%	0 0%	8 47.2%	3 37.5%	3+5 16.1%	5(第四期) 18.4%
その他の活用形 比率	0 0%	2 100%	19 52.8%	12+8 62.5%	41+32 83.9%	(8+32) 81.6%
全用例数	7	2	36	32	87	49

注：その他の活用形中の未然形からは否定の助動詞「ぬ」の用例を除いた。年代未詳歌のその他の活用形の用例数のうち（ ）内の数字はそれぞれ第三期、第四期のものである。

表1では、年代未詳歌を一旦単独で集計したが、これを第三期と第四期に分散させると、第三期のA、Bが12例となり、全用例数に占める比率は37.5%、第四期のA、B合わせた14例の全用例数に占める比率は16.1%に大きく減少する。佐竹昭広（1964）によって指摘された、「古代和歌独自の類型」である「動詞・助動詞の終止形+『見ユ』」の形式は、接続形式、活用形（終止形終止法）とも、上代歌謡においてもっとも特徴的であり、それに比べて万葉集においてはその用例数が次第に減少していき、万葉集に限ってみれば、万葉集第一期にはA、Bの例を見ないものの、A、Bの用例は、第二期と第三期から第四期にかけて大きく後退することになる⁷。これは、前節で見たような「自己中心係数」の低下と軌を一にするものであり、とりわけ「見ユ」の接続形式、活用形（終止形終止法）が、時代が降るにつれて減少していく傾向は、歌風や文体の変化とともに、文法史的な変化であることを窺わせることが予想される。

ここで改めて「動詞・助動詞終止形+見ユ」という接続形式と「見ユ」の終止形終止法という、上代語の「見ユ」の二つの特殊な用法を見てみると、動詞「見ユ」が「動詞・助動詞の終止形」を承ける用法は、上代歌謡から万葉第四期にかけて減少する傾向が著しく、古今集以降まったく見られなくなることは、佐竹昭広（1964）の指摘したとおりである。一方、「見ユ」の終止形終止法については、万葉集では時期が降るにつれて減少傾向にあるものの、まったく見られなくなるわけではなく、これは、上代語に限らず、いつの時代にもある用法である。ここにまず両者の違いを見ることができる。つまり、「動詞・助動詞終止形+見ユ」の接続形式と、「アリ」を含む、動詞・助動詞の終止形を受ける助動詞「らむ」、「らし」などの語源を考え合わせれば、「アリ」同様、「見ユ」もこのような動詞・助動詞の終止形を承ける接続形式が古くあったことが推定される。そして、「見ユ」の終止形終止法と併せて、「見ユ」が積極的に助動詞への接

続によってその意味的分化を果たすようになるまでの、接続形式だったのではないかと考えられる。

先に例⑤として示した「潮瀬の 波折を見れば 遊び来る 鮪が鰭手に 妻立てり見ゆ」（記歌謡・108）を例にすれば、「～を見れば～見ゆ」の形式はさておき、「見ユ」の対象は「遊び来る 鮪が鰭手に 妻立てり」という動詞文であり、そこには「場所＋対象＋動作」が一つの情景としていわば未分析のまま捉えられ、動詞文の意味内容そのものがそのまま「見ユ」の対象であったのである。これに対して、例⑥「家庭も見ゆ 国の秀も見ゆ」（記歌謡・42）では、「対象」＋「見ユ」という単純な形式となり、「見ユ」の「対象」のみ強調された分析的な表現になっている。このような表現の分析的な傾向は、「見ユ」の「対象」に限らず、その「場所」にも現れている。

2.3 上代語の「見ユ」の「対象」と「場所」

上代歌謡の「見ユ」は終止形終止法以外用いられず、文型も単純であったのに対し、万葉第一期以降は、終止形、連体形を中心に、文型もバリエーションに富むようになるという傾向が認められる。中でも、上代歌謡で高い割合で用いられていた「動詞・助動詞終止形＋見ユ」の未分析的な情景描写に対して、万葉第一期から第四期にかけては、「動詞・助動詞終止形＋見ユ」と『見ユ』終止形終止法の用例の減少に並行して、「対象＋見ユ（連用形・未然形）」と「対象＋場所＋見ユ（連用形・未然形）」の分析的な表現が増えていくのである。傾向的には、「見ユ（終止形終止法）」は、「動詞・助動詞終止形＋見ユ」、「対象＋見ユ」に、「見ユ（連用形・未然形）」は、「対象＋場所＋見ユ」への偏りが見られる（詳しくは付録「上代語の『見ユ・見エ～』の用法」を参照されたい）。両者の相関関係を表に示すと、表2になる。

【表2】「見ユ」の「場所」と活用形との相関

	見ゆ・見ゆる（連体形）					見え（連用形・未然形）				
	夢に	面影に	雲居に	その他	用例数	夢に	面影に	雲居に	その他	用例数
上代歌謡 比率				7 100%	7					
万葉第一期 比率						1 50%	1 50%			2
万葉第二期 比率	2 9.5%			19 90.5%	21	6 46.2%	1 7.7%		6 46.2%	13
万葉第三期 比率			1 5.6%	17 94.4%	12+6 (18)	4+3 58.3%	1 8.3%		1+3 33.3%	6+6 (12)
万葉第四期 比率	6+4 25.6%	2+3 12.8%	+1 2.6%	23 58.9%	25+14 (39)	11+19 62.5%	1 2.1%	2 4.2%	9+6 31.3%	23+25 (48)

注：＋数字は年代未詳歌の数である。第一期 0149 番歌の「影に見えつつ」、第二期 2462 番歌「影に見え来ね」を、「面影に」に分類した。

第四期「見え」には「見えじ」3 例（年代未詳歌 1 例を含む）を入れた。その他の内訳「我に」3 例（第二期 1、第三期 1、第四期 1）、「人に」2 例（第四期）、「妹に」1 例（第二期）を含む。

表2で見るかぎり、上代歌謡の7例中、「動詞・助動詞の終止形+見ユ」3例を除く4例は、いずれも「対象+見ユ」の例であり、「場所+見ユ」の例は見られなかった。それが、万葉第一期から第四期にかけて、「見ユ（終止形・連体形）」が「動詞・助動詞終止形+見ユ」、「対象+見ユ」の形式に偏るのに並行して、「見ユ（連用形・未然形）」は、「対象+場所+見ユ」の形式に偏り、中でも、共起する場所は「夢・影」をもって多とする。ここに見る、述語「見ユ」に先行する諸要素の分析的な傾向と述語「見ユ」の活用形を介して後続する諸成分との相関関係は、奇しくも、阪倉篤義（1953）以降、語順の連続相を詞と辞の連続相として捉えようとする一連の研究⁸が明らかにしたような、述語に上位する諸成分と述語に下位する諸成分との上下相称的な関係、すなわち呼応関係を示すことになる。これを、述語「見ユ」から上位、下位へ意味的に分出される諸成分間の呼応関係としてみれば、7例すべて終止形終止法で用いられていたことは、上代歌謡の「見ユ」が、時代が降るにつれて、意味的な分出を盛んにしていく過程がすなわち万葉第一期から第四期までの「見ユ」の活用形の展開と助動詞への接続による意味の多様化の過程であり、活用しない「見ユ」から活用する「見ユ」への変化がただ単に歌風、文体の変化にとどまらず、文法史的な変化である可能性を示唆すると考えられる。

2.4 上代語の「見ユ」の意味

「動詞・助動詞終止形+見ユ」の「見ユ」の意味については、佐竹昭広（1964）は、次のように述べている。

形状性用言「見ユ」の意味は、見えて来る作用ではなく、見えるという状態である。五味保義氏は、「万葉詞句考―『見ゆ』の問題―」（国語国文九ノ二）において、動詞の終止形からつづく「見ユ」が「見える」意でなく、「現在何々しつつある」気持だということを指摘された。「見ユ」に「つつ」の意を擬した五味氏の解釈には、「見ユ」の形状性が見事に掴まれていると言わねばならない。また、「舟出せり見ゆ」、「さわぎたり見ゆ」のごとく、「見ユ」の承ける動詞に「り」、「たり」の接した例が少なくないことも、「見ユ」の形状性に照らしてみれば当然のことである。（佐竹昭広 1964：12 頁）

果たして、そうであろうか。「見ユ」が動詞として先行する名詞を対象として、それが視覚的に存在する意とすれば、先に挙げた上代歌謡のB類の用法がむしろ基本ではないかと思われる。

しかし、それを「現在何々しつつある」とすることの根拠は、「見ユ」そのものに見いだすことができないようである。たとえば先に挙げた例⑤「潮瀬の波折を見れば遊び来る鮓が鰭手に妻立てり見ゆ」（記歌謡・108）の場合、「鮓が鰭手に妻立てり」によって解釈される「妻が立っている」という状景と「見ユ」が「何々しつつある」という

意味とは厳密に区別すべきであろう。「何々しつつある」という意味は、たとえば、次の例のような場合がもっとも読み取りやすい。

⑦人はよし思ひ止むとも玉縵影に見えつつ〔影尔所見乍〕忘れぬかも（0149）

天智天皇崩御時倭太后の歌。天智十年（671）

これによって見ると、例⑤の「見ユ」が助動詞化したわけでも、その意味が変化したわけでもないと考えなければならない。とすれば、五味保義（1939）の説は、むしろ歌全体から受けけた印象、歌全体の意味から類推された文脈的な解釈に過ぎないのではないと思われる。「見ユ」自体はあくまでも「見ユ」であり、それは対象が物的なものであっても、文の形式を取る状景であっても、対象が物なのか状景なのかの違いだけで、対象が視覚的に存在するという意味が基本的に変わらないのではないかと考えられる。このことは、一般に「万葉集における動詞の＜基本形＞は、文末用法に限定してみるならば、現在を表すのが普通である。」（山口佳紀 1997：p.302.）とされることによって裏付けられる。もっとも、上代語の「見ユ」の次のような形容詞の連用形を承ける場合、「～の様子がある」の意に用いられる。

⑧しらぬひ筑紫の綿は身に付けていまだは着ねど暖けく見ゆ〔暖所見〕（0336）

天平二年（730）【第三期】

⑨十月しぐれの常か我が背子がやどののみち葉散りぬべく見ゆ〔可落所見〕（4259）

天平勝宝三年（751）【第四期】

しかし、これも上代語の「見ユ」の本質的な意味機能から逸脱したものと考えられるかどうかいささか躊躇せざるをえないものに過ぎない。そして、この二例を除く「終止形+見ゆ」の「見ユ」の意味は、更に「見ユ」と同じく終止形に接続する助動詞「ラム・ラシ・ベシ」を比較することによっていっそうはっきりするように思われる。

⑩鉗着け 吾が飼ふ駒は 引出せず 吾が飼ふ駒を 人見つらむか（書紀歌謡・115）

例⑤と例⑩を比較してみると、例⑩の「ラム」が承ける文の意味内容を仮に「事態」とすれば、「ラム」を除く部分は「推測される事態」となり、例⑤の「～妻立てり」は正に「現前の視覚事実＝事態」になる。それに対して、「見ユ」はそうした「現前の視覚事実＝事態」が視覚的に存在することを確認するという意味以外に、助動詞化した意味を積極的に指し示すものではない。「見ユ」は「現二目二見エル」こと自体を表すものと考えられる。したがって、上代語についてその特殊性が指摘されている「見ユ」の用法はあくまでも「動詞・助動詞終止形+見ユ」という形式的なものであり、「見ユ」の意味に違いを認めるに及ばないこと明らかである。

3 万葉集における「見ユ」の活用形と助動詞への接続

一活用しない「見ユ」から活用する「見ユ」へ

3.1 「見ユ」の活用形の展開 一活用形の意味と助動詞の役割一

上代歌謡では、終止形終止法のみ用いられ、活用の形式が用いられなかった「見ユ」は、万葉集ではどのような活用形が用いられるようになったのか、を見るために、上代歌謡と万葉集に現れる「見ユ」の活用形を、表3に集計した。

【表3】上代歌謡と万葉集に現れる「見ユ」の活用形の展開

資料 活用形	上代歌謡 (7)	万葉第一期 (2)	万葉第二期 (36)	万葉第三期 (17+12)	万葉第四期 (47+37)	年代未詳歌 (49)
終止形終止法A 比率	3 42.9%	0 0%	9 25%	5+4 31.0%	6 7.1%	4(第三期) 8.2%
終止形終止法B A+Bの比率	4 100%	0 0%	8 47.2%	3 41.4%	3+5 16.7%	5(第四期) 18.4%
連体形 (係り結び)	0	0	2	0	3+2	2(第四期)
連体形終止法	0	0	0	0	3+1	1(第四期)
連体形+名詞 連体形の比率	0	0	2 11.1%	4+2 20.7%	9+4 26.2%	6(2+4) 18.4%
連用形 連用形の比率	0 0%	2 100%	14 38.9%	4+6 34.5%	18+23 48.8%	29(6+23) 59.2%
未然形	0	0	1	1	5+1	1(第四期)
已然形 未然形・已然形の 比率	0	0	0 2.8%	0 3.4%	0+1 8.3%	1(第四期) 4.1%
全用例数	7	2	36	29	84	49

注：①未然形からは否定の助動詞「ぬ」の用例を除いた。②年代未詳歌の各活用形の用例数のうち（ ）内の数字はそれぞれ第三期、第四期のものである。③小数点二桁を四捨五入した。

表3で見る限り、万葉集を通じて、「見ユ」にはすべての活用形が揃っているものの、連用形が他の活用形に比して、多く用いられているのが注目される。それに次いで多く用いられているのは、連体形である。中には、係り結びに用いられるものもあり、「連体形+名詞」の形もあるが、前者を連体形終止法とともに「見ユ」の終止形終止法に準じて考えればよく、後者は連体形の本来の用法である。未然形については、否定の助動詞「ず」に下接する例を除いたものなので、用例数こそ多くないが、推量系の「む」などを下接するものである。活用形のはたらきを、連用形・未然形・已然形に他の助詞・助動詞が下接することによって、用言の意味を、さまざまな文法的な働きに応じて助詞・助動詞として分出するものと考えれば、表3に見られる活用形の展開と助動詞への接続が文法意義を持つことが予想される。

3.2 『見ユ』連用形+助動詞』による意味の分出

―意味の多様化とその文法史的な意義―

上代歌謡の「見ユ」がもっぱら終止形終止法に用いられていたのに対し、万葉集では「見ユ」の連用形を中心に、助詞・助動詞が下接する例が増えていくのは先の表3の示すとおりである。表4は、上代歌謡から前期万葉、後期万葉の「見ユ」の連用形に下接する助詞・助動詞の出現順を集計したものである。

【表4】「見ユ」連用形+助詞・助動詞の用例数の分布

資料		上代歌謡 (0)	万葉第一期 (2)	万葉第二期 (14)	万葉第三期 10 (4+6)	万葉第四期 41 (18+23)
A	つ		1	1	+1	2+2
	つつ		1	2	2+1	3+3
	て			3	1	4+1
	き			1		1+3
B	～来			2		1
	こそ（希求）			4	1+4	1+8
	な～そ（禁止）			1		
C	ぬ					2+1
	けり					4+2
	けむ					+1
D	～反る					+1
	中止法					+1

注：年代未詳歌を算入したもの。+数字は年代未詳歌の歌。

表4を通してみると、まず以下の三点が注目される。

- 一、万葉集を第一期～第四期に分けて見ると、「見ユ」の助詞・助動詞への接続は連用形を中心に、A～Dという順序にそって展開したこと。
- 二、「見ユ」の連用形に下接する動詞・助詞・助動詞の意味範疇には、空間的（B）・時間的（A、C）という二つの意味範疇に加えて、話者への関係性を表すものが見られる。
- 三、「見ユ」に下接する助動詞は、助動詞の相互承接の順位が「中間的な位置」に位するものであること⁹。
- 四、「キ・ケリ」、「ツ・ヌ」のように二者対立をなす助動詞が、「キ→ケリ」、「ツ→ヌ」という順序で現れること。

以下、この四点に沿って見ていきたい。

まず一、二について、細かく見てみると、Aグループには助詞「つつ」、「て」といった「継続」、「中止」などの動作様態を表す助詞とともに、いわゆる「過去・完了」¹⁰を表す助動詞「キ」、「ツ」が属し、Bグループには、複合動詞後項「～来」、希求の助動詞「コソ」、禁止の「ナ～ソ」など、話者への空間的な移動、もしくは話者への関係性を表すものが属する。そして、Cグループは、「キ」に対して「ケリ」、「ツ」に対して「ヌ」

といった、二者対立の助動詞である。Dグループは連用形の中止法と複合動詞「～反る」である。中止法の機能は文同士の並列関係を表すものであるが、複合動詞「～反る」はBグループの空間的な意味分化に属するものである。

このように見てみると、万葉第二期までは、「見ユ」の下接する助詞・助動詞はA、Bのグループに限られるが、第四期にいたってはじめてC、Dのグループが現れるという顕著な違いが認められる。とりわけ、Cグループの「見えぬ」、「見えけり」と、先に「我に見ゆ」に対して「人に見ゆ」の例が第四期に初めて現れることを考え合わせれば、上代歌謡、前期万葉、万葉第三期と万葉第四期の間に文法史的な一線を画することができそうである。このことは、時間にして前後150年前後に及ぶ万葉集を一つの共時態としてよりもいくつかの時期に分けて見る必要があることを示唆すると思われる。と同時に、「見ユ」の活用形の展開と助動詞への接続は、単なる文体の問題にとどまらず、文法史の問題として扱うことの可能性を示唆する。というのは、「ツ」の最初の用例、第一期に属する天智天皇崩御時婦人の歌（天智10年671）から、第四期の「ヌ」の用例、天平8年（736）1例、天平9年（737）1例（年代未詳歌2例を除く）まで、第二期に属する「キ」（人麻呂歌集¹¹：天武朝（673-685）の諸作と推定される）から、第四期の「ケリ」の用例、天平年次未詳（729-748）2、天平19年（747）2例（家持1例、池主1例、年代未詳2例を除く）までは、いずれも50～60年の歳月を閲したことは、ただ単に歌風と文体の変化に帰することも可能であるが、これに、先の表3の示すような、上代歌謡、万葉第一期、第二期、第三期、第四期を通じて、A、Bの用例の減少と連用形の用例の増加に有意差が認められることを考え合わせれば、これを、ただ単に文体的な問題だけでなく、文法史的な問題として考えることの必要性がいっそう強く示唆されるように思われる。

このように、「見ユ」の用法の史的な変化を文法史の問題として考えた場合、活用しない「見ユ」から活用する「見エ」への変化の意義は何か、「我に見ゆ」から「人に見ゆ」への変化の意義は何か、そして、連用形を中心に、他の助詞・助動詞に下接して、「見ユ」がさまざまな文法的な働きに応じて助詞・助動詞を分出するようになったことの意義は何か、これらの問題に答えるために、先に挙げた第二点、「見ユ」の連用形に下接する動詞・助詞・助動詞の、空間的・時間的、そして話者への関係性という三つの意味範疇を見てみたい。

すでに先に挙げた例⑤との対比について見たように、「見ユ」は「現前の視覚事実＝事態」を表すものであった。この「見ユ」の意味は、その連用形にいわゆる「完了」の助動詞「ツ」が下接する際、いっそうはっきり示される。

⑪汝が恋ふる妹の命は飽き足らに袖振る見えつ〔袖振所見都〕雲隠るまで（2009）

年代未詳・人麿歌集

そして、次の例⑫のように、「昨夜」と共起する場合でも、「見ユ」の意味は変わらない。

⑫我が恋ふる君そ昨夜夢に見えつる〔夢所見鶴〕（0150）天智天皇崩御時婦人の歌。

天智十年（671）

例⑪、⑫の場合、終止形「見ユ」に対して、「見えつ」はその事態が「実現」したことを表すとすれば、先の例⑤の「見ユ」と例⑪、⑫の「見えつ」との違いは、現前の対象が視覚的に存在するというのと、そうした現前の対象が視覚的に存在することがすでに過去に実現したというちがいになる。これを仮に「見ユ」に対する時間的な意味の分出とすれば、空間的な意味、もしくは話者への関係的な意味として助詞を分出した例は、次の例⑬である。

⑬里遠み恋ひうらぶれぬまそ鏡床の辺去らず夢に見えこそ〔夢所見与〕（2501）

年代未詳・人麻呂歌集

例⑬の「コソ」は希求の助動詞とされるが、その前身は「～来^こす」であることは、木下正俊（1957）の指摘するとおりであろう。そして、複合動詞の例ではあるが、「～来」の例も空間的な意味の分出の例である。

⑭我妹子を夢に見え来と〔夢見来〕大和道の渡り瀬ごとに手向そ我がする（3128）

年代未詳・人麻呂歌集

そして、例⑭のような「来」に語源を持つ助動詞「キ」は、空間的な意味（対象の話者への移動）から助動詞化しても、すでに実現した事態を話者の直接経験として回想するものであり、話者への関係的な意味への分出の意味合いが読み取れる。「『き』は過去の事実をおのが体験として話す（記す）」（浅野信 1958:63 頁）ことがそれを裏付ける。

⑮天の川水さへに照る舟泊てて舟なる人は妹に見えきや〔妹等所見寸哉〕（1996）

年代未詳・人麻呂歌集

そして、例⑬、⑭、⑮はいずれも人麻呂歌集に出る歌であることを考慮すれば、上代歌謡から万葉第二期、とりわけ人麻呂までの「見ユ」の連用形に続く助動詞は、「時間的・空間的」、そして「話者への関係」という三つの関係に対応して、それぞれの助動詞によって意味的な分出が行われていたとみることができる。上代歌謡では、否定の助動詞「ず」を除けば、「見ユ」の終止形終止法しか用いられていなかったのと、万

葉第二期では、「時間・空間」、話者との関係への意味分出が行われていたことの意義は、万葉集の各時期における歌風、文体の変化よりも、文法史的な推移にあるように思われる。文体、歌風の変化を根底から支えているのは、このような活用しない「見ユ」から活用する「見ユ」への文法史的な推移ではないかと考える。

このように「見ユ」の連用形+助動詞の出現を見ていくと、万葉第四期において、「見ユ」の連用形「見え」に中止法の用例と複合動詞の例「～反る」が一例ずつあるのを除けば、助動詞「ヌ」、「ケリ」、「ケム」が続く例が現れる。とりわけ、第四期において「見えつ」と「見えぬ」の用例が同時に観察されることは、「見ユ」の意味分出のあらたな局面として注目されてよい。「見えぬ」の二例と「見えつ」の例を挙げておく。

- ⑬なづさひ行けば家島は雲居に見えぬ〔久毛為尔美延奴〕我が思へる心和ぐやと（3627）

遣唐使の歌、天平八年（736）

- ⑭我妹子を行きてはや見む淡路島雲居に見えぬ〔久毛為尔見延奴〕家付くらしも（3720）

遣新羅使の歌、天平九年（737）

- ⑮手に巻ける玉もゆららに白たへの袖振る見えつ〔袖振所見津〕相思ふらしも（3243）

年代未詳・作者未詳【第三期】

- ⑯生きてあらば見まくも知らずなにしかも死なむよ妹と夢に見えつる〔夢所見鶴〕（0581）

家持の歌、天平年次未詳（729 - 748）

例⑬～⑯を通して見ると、「見えぬ」には「雲居」が共起し、例⑯には「夢」が共起することが両者の違いを示しているように思われる。「見えつ」の他の二例、年代未詳「面に見えつる〔於母尔美要都留〕」（3473）、年代未詳「夢に見えつる〔夢所見鶴〕」（3117）がいずれも話者の現前か「夢」のような、話者にだけ所有される空間をあらわす名詞と共起することを考えれば、例⑮の場合、それが明示されていないものの、おそらく「面に」を補ってもいいところであろう。それは、話者にとっての空間的・心理的な「近 vs. 非近」に「見えつ」と「見えぬ」が対応するということを示唆するように思われる。「見ユ」が万葉第一期において「ツ」を下接させ、第四期において更に「ヌ」をも下接させるのと同じく、例⑳、㉑のように第二期に「キ」を下接させ、第四期に更に「ケリ」を下接させ、「見えき」、「見えけり」の用例が同時に観察されることになる。

- ⑳我妹子に恋ひてすべなみ白たへの袖返ししは夢に見えきや〔夢所見也〕（2812）

年代未詳・作者未詳【第四期】

- ㉑あしひきの山きへなりて遠けども心し行けば夢に見えけり〔伊米尔美要家利〕（3981）

家持の歌、天平十九年（747）

例②⑩については、形式的には「見ユ」の主体（「見る人」）は第二人称としなければならないが、「見えきや」を話者の経験を問う形式と見れば、「キ」は話者の直接経験を表すものとして差し支えない。とすれば、「見えき」から「見えけり」へという「見ユ」の助動詞への接続も、先の「ツ・ヌ」と同じく、話者との心理的「近 vs. 非近」の関係による意味分化と考えてよさそうである。つまり、上代語の「キ」は、話者の直接経験した主観的な事態に、「ケリ」は、「過去の事実を客観的に報告的に語る」（浅野信 1958：63 頁）、というより客観的な経験、ないし「間接経験」¹²に対応するということになる。

そして、佐竹昭広（1975）によって指摘された「上代人の自己中心係数」も、「すべての対象を自己との関係において主体的に把握するこころの持ち主だったことを意味する」とすれば、「見ユ」に下接する時間的、心理的「近 vs. 非近」の二項対立をなす助動詞「ツ・ヌ」、「キ・ケリ」のうち、いずれも時間的、心理的「近」、つまり主観的な事態に対応するものが時代的に先行し、時間的・心理的「非近」に対応するものが後れて用いられるということは、とりもなおさず、上代歌謡・万葉第一期から第四期にかけて、上代人の事態に対する把握の仕方が変化したことを意味するのではないか、と思われる。それは、同じく話者の経験であっても、それをどのように把握するかによって「キ」と「ケリ」が用いられ、つまりより主観的な把握には、「キ」が、より客観的な把握には「ケリ」が対応することによって裏付けられる。そして、助動詞「ツ・ヌ」の二項対立も、同じく事態に対するより主観的な把握とより客観的な把握に対応するとすれば、万葉第一期から第四期にかけて、「見ユ」の連用形に下接する助動詞の出現順は、話者の、視覚的に存在する事態に対する把握の仕方の変化と捉えることができる。一方、過去に完了した事態の推量と予想される事態の推量は、連体形接続の助動詞「ケム」と未然形接続の助動詞「ム」によって表される。

②②門たてて戸はさしたれど盗人のほれる穴より入りて見えけむ〔入而所見牟〕（3118）

年代未詳・作者未詳【第四期】

②③直に逢はずあらくも多くしきたへの枕去らずて夢にし見えむ〔伊米尔之美延牟〕（0809）

0807 番歌への答歌、天平元年（729）

例②②の「ケム」が一般に完了した事態の推量を表すとされるのに対し、予想される事態の推量は、「見ユ」の未然形につづく「ム」によって表される。

以上見て来たように、万葉集では、「見ユ」の連用形に優先的に接続するのは、時間的・空間的な意味、話者への関係性を表す助動詞、そして事態に対する話者の態度を表す助動詞であった。これによって「見ユ」の助動詞への接続による意味分出の過程を、時間軸にそってまとめると、次のようになる。

- 一、「現前の視覚事実＝事態」を表すもの：「見ユ」終止形・「見ユ」連用形＋助詞・助動詞
- 二、終止形終止法の「見ユ」は「現前の視覚事実＝事態」を表すのに対し、「見え（連用形）＋助動詞」は「事態の実現の仕方（空間的・時間的・関係的）、つまり、対象の「見え方＝見方」（時間的に空間的に話者との関係においてどのように見えるか）を表すものである。
- 三、「予想の事態」を表すもの：「見え（未然形）＋助動詞」（未実現の事態の推量で）¹³・「見え（連用形）＋ケム」（実現した事態の推量）

以上は、事態の客体的な側面に即したものであるが、「見ユ」に下接する助動詞の「ツ・ヌ」、「キ・ケリ」はいずれも助動詞の相互承接の順位が中間的な位置に位することは、これらの助動詞にはただ事態の客体的な側面に止まらず、事態に対する話者の主体的な態度をも表すことを意味する¹⁴。以上のことを、事態に対する話者の主体的な態度という側面に即して見直せば、「見ユ」の連用形＋助詞・助動詞の意味範疇は以下の三つにまとめられる。

- I. 「ツツ・テ」：事態の実現そのもの
- II. 「～来」・「コソ（希求）」・「ナ～ソ（禁止）」：話者への空間的または関係的な方向性
- III. 「ツ・ヌ」、「キ・ケリ」：事態の実現の仕方＋事態に対する話者の態度ないし把握の仕方

最後に、第四点、「ツ・ヌ」、「キ・ケリ」のように二者対立をなす助動詞が、「ツ→ヌ」、「キ→ケリ」という順序で現れることについて考えてみたい。

第四期において、「見えき・見えけり」、「見えつ・見えぬ」が対比的に用いられることになる。上代歌謡と前期万葉では、対象を即物的に描写する「動詞・助動詞終止形＋見ユ」が優勢であったのに対し、万葉第四期では、とりわけ「見ユ」の連用形＋助動詞に、「見えき・見えけり」、「見えつ・見えぬ」が用いられるようになることは、おそらく単なる歌風、文体の変化ではなく、文法史的な変化にあるのではないかと考えられる。そして、上代歌謡から後期万葉にかけて、「我に見ゆ」から「人に見ゆ」への変化の意義も、万葉第三期を過渡期として、前期万葉と万葉第四期とで、状景を即物的に描写する、話者の主体的な「物の見方」から、話者と対象との関係が、空間的・心理的・関係的な「近 vs. 非近」によってより対象に近く把握されるようになる、つまり情景描写の仕方、対象把握の仕方の変化があったとすることによって、説明できようかと思われる。

以上述べてきたことをまとめると、次のことがいえるようである。

- 一、佐竹昭広（1975）の指摘した上代から平安時代にかけての「自己中心係数の低下」は上代語でも万葉第一期から第二期、第三期を経て第四期にはすでにそうとう低下していた。これは、ただ単に文体の問題に止まらず文法史の問題でもある。
- 二、活用しない「見ユ」から連用形を中心に活用するようになる「見ユ」への変化は、話者の対象の見え方＝見方の変化を示唆する。それは、話者中心の見方から他者との関係に基づく「キ・ケリ」、「ツ・ヌ」のような二者対立の助動詞の意味対立を考える上で参考になる。
- 三、「見ユ」連用形に下接する動詞、助動詞に見る空間的・時間的な「近 vs. 非近」は話者への心理的關係性として、上代語の人称体系、「一人称 vs. 非一人称」¹⁵との相関を窺わせられる。
- 四、万葉第四期において「見えつ・見えぬ」／「見えき・見えけり」の対立を見ることの意義は、上代歌謡（活用しない「見ユ」）から、万葉第一期、第二期、第三期を経て、「ツ・ヌ」、「キ・ケリ」の意味対立が見られるようになることであり、文法史的に上代歌謡と「万葉集」を一つの共時態と見るよりは、万葉第一期、第二期、第三期、第四期に分けることの必要性を物語るものと思われる。

このように見てくると、佐竹昭広（1964）の次の指摘も、見直されなければならないように思う。

作者の意識の底には、一つの状景を詠ずるにあたっても、あえて「見ユ」と述べざるをえない強い欲求があった。動作の進行を「見ユ」で表現しなければおさまらない潜在的な何かがあった。「強い欲求」「潜在的な何か」が、存在が見えるすがたにおいて描写的に把握しようとする古代の心性であることは、もはや繰り返すまでもない。（佐竹昭広 1964：13 頁）

「見ユ」は動作の進行を表すものではないことはすでに指摘したが、「存在が見えるすがたにおいて描写的に把握しようとする古代の心性」は肯定してよさそうである。そして、

古今集以後、急激におとずれた「見ユ」の衰退は、換言すれば、「見ユ」を用いる文体が崩壊したということである。存在を視覚によって把握する古代的思考の後退こそ、その決定的要因であった。かつて「見ユ」の文体を支えていた古代的意味の基盤が失われたとき、文体は必然的に崩壊せざるをえなくなった。古代和歌における「見ユ」の頻用には、意味の問題と文体の問題とが深くかかわり合っているのである。（佐竹昭広 1964：13 頁）

との指摘である。しかし、すでに見てきたように、佐竹昭広（1964）の指摘するところの「古代和歌における『見ユ』の頻用」は、万葉集より古いとされる上代歌謡の顕著な特徴であり、万葉集以降、衰退の一途をたどり、万葉第四期ではすでに「見ユ」

の衰退がそうとう激しく、おそらく古今集までに完全に衰退してしまったと見るべきであろう。そして、それより重要なのは、上代歌謡と万葉集の「見ユ」の用例の分布はけっしてランダムなものではないことともに、それを歌風、ないしは文体の問題とするよりは、その活用の形式といい、連用形に続く助動詞といい、その時間軸に沿った活用形と助動詞の承接の展開は、この問題が文体の問題とともに、文法史の問題でもあったことを示唆していると考えられる。

4 まとめ

本稿は、佐竹昭広（1964）、佐竹昭広（1975）を踏まえて、上代歌謡と万葉集の「見ユ」の用例を分析した。とりわけ、一、「見ユ」と一人称との関連、二、上代語における「動詞・助動詞終止形+見ユ」の形式と「見ユ」の意味、三、「見ユ」の活用形に助詞・助動詞が下接する用法との文法史的な意味づけについて考察を試みた。

一については、佐竹昭広（1964）、（1975）が指摘した「上代人の自己中心係数」は、上代歌謡と前期万葉において特に顕著なものであり、万葉集の中でも、万葉第三期、第四期と時期が降るにつれてすでに次第に低下していく傾向が見られ、「上代人の自己中心係数」の低下は、文体史的な問題とともに文法史的な問題でもあると考えられる。

二については、上代語における「動詞・助動詞終止形+見ユ」の形式は特に上代歌謡に顕著な特徴であるが、万葉集を第一期、第二期、第三期、第四期に分けてみた場合、その用例が次第に減少していくのに平行して、「見ユ」の活用形、特に連用形を中心に助詞・助動詞が下接する用法が増えていく傾向が見られた。上代語の「見ユ」は視覚的にもものが存在する意、すなわち「現前の視覚事実＝事態」を表す動詞であり、その終止形終止法は現在を表すものと考えられる。

三、「見ユ」連用形に下接する助動詞のうち、いわゆる「過去」の助動詞では「キ」が、いわゆる完了の助動詞では「ツ」が先行し、「ケリ」と「ヌ」はいずれも第四期において初めて用いられ、「見ユ」の活用形に下接する助詞・助動詞の出現には一定の順序が見られた。これは、上代歌謡から前期万葉・後期万葉までの上代語の資料を一つの共時態として見るよりは、上代歌謡→前期万葉（万葉第一期、第二期）→後期万葉（万葉第三期、第四期）に分けて考えたほうが有効であることを示すとともに、「ツ・ヌ」、「キ・ケリ」の意味機能を考える上で示唆されるところが大きいと考えられる。

四、「見ユ」連用形に下接する動詞、助動詞に見る空間的・時間的な「近 vs. 非近」は話者への心理的、関係性として、上代語の人称体系、「一人称 vs. 非一人称」との相関を窺わせられると思われる。

附録：上代語の「見ゆ・見え～」の用法

○〔上代歌謡〕【見ゆ】7例

- ・〔見ゆ（終止形終止法）〕7例

A「動詞・助動詞の終止形＋見ユ（終止形終止法）」3例

A'「対象（モ）＋見ユ（終止形終止法）」4例

○〔万葉第一期〕2例（「見えぬ」1例を除く）

A「動詞・助動詞の終止形＋見ユ（終止形終止法）」0例

A'「対象（モ）＋（場所〔ニ〕）＋見ユ（終止形終止法）」0例

B「対象＋場所（夢）〔ニ〕＋見ユ連用形＋ツ連体形終止法（係り結び）」1例

「対象＋場所（影）〔ニ〕＋見ユ連用形＋ツツ」1例

○〔万葉第二期〕【見ユ】25例→21例＋13例

- ・〔仮名書き「見ユ」（終止形終止法）〕6例→2例／〔所見・見〕17＋2例

A「動詞・助動詞の終止形＋見ユ（終止形終止法）」9例

A'「対象（モ）＋見ユ（終止形終止法）」4例

A''「対象＋（場所〔ニ〕）＋見ユ（終止形終止法）」2

「見ル場所〔ヨリ〕＋見ユ（終止形終止法）」2例

「対象＋場所（夢）〔ニ〕＋見ユ連体形終止法（係り結び）」2例

B「対象＋場所（夢）〔ニ〕＋見ユ連用形＋ツ連体形終止法（係り結び）」0例

B'「対象＋（場所〔ニ〕）＋見ユ連用形＋ツ（終止形終止法）」1例

「対象＋場所（夢）〔ニ〕＋見ユ連用形＋ツツ」1例

「動詞・助動詞終止形＋見ユ連用形＋テ」1例

「対象＋場所〔ニ〕＋見ユ連用形＋テ」1例

「（対象）＋副詞＋見ユ連用形＋テ」1例

「対象＋場所（夢）〔ニ〕＋見ユ連用形＋コソ」4例

「対象＋場所（夢・影）〔ニ〕＋見ユ連用形＋来」2例

B''「対象＋一人称（我）〔ニ〕な～そ」1例

「対象＋二・三人称（妹）〔ニ〕＋見ユ連用形＋キ（ヤ）」1例

C「場所（雲居）〔ニ〕＋見ユ連体形＋対象」2例

- ・〔見え＋助詞・助動詞（否定の「ず」（7例）を除く）〕13例）

〔連用形〕

「見えつつ」1例→0例（古歌集1例） 一例→第三期

「見えつ」1例

〔見えて〕3例（人麻呂の歌）

〔見えこそ〕4例（「夢」）

〔見えきや〕1例

〔な見えそ〕1例「一人称〔ニ〕+見え」1

〔見え来〕2例（夢1・影1）

〔未然形〕

〔見えむ〕0例 B1 →第四期

○〔万葉第三期〕12例+12例

・〔見ユ〕2例（2例とも「終止形+見ユ」）・〔所見・見〕9+1例

A「動詞・助動詞の終止形+見ユ（終止形終止法）」5例+4例

A'「対象+（場所〔ユ〕）+見ユ（終止形終止法）」2例

A''「対象+場所（夢）〔ニ〕+見ユ連体形終止法（係り結び）」0例

B「対象+場所（夢）〔ニ〕+見ユ連用形+ツ連体形終止法（係り結び）」0例

B'「対象+場所〔ニ〕（夢・影・面影）+見ユ連用形+ツツ」4例

「対象+（場所（我）〔ニ〕）+見ユ連用形+ツ」1例

「対象+場所（夢・我）〔ニ〕+見ユ連用形+コソ」5例

B''「副詞（ほのかに）+見エ+テ」1例

「一人称〔ニ〕な～そ」0例

「二・三人称〔ニ〕+見エ+助詞・助動詞」0例

C「場所〔ユ〕+名詞（「そがひに」）+見ユル+対象」4例

D「対象+見ユ未然形+ム」1例

E「形容詞連用形+見ユ」1例

・〔見え+〕12例（〔見えず〕（8例）略）

〔連用形〕

〔見えつつ〕2例 +1（巻7）=3例→4例（「夢」1、「影」1、「面影」1）

〔見えつ〕（巻13）1例

〔見えて〕1例

〔見えこそ〕1例 +1（巻7）+3（巻13）=5例（「夢」4、「我」1）

〔未然形〕

〔見えむ〕1例

○〔万葉第四期〕25+48例

・〔見ユ〕仮名書き例13例／〔所見+見〕12+0=12例

A「動詞・助動詞の終止形+見ユ（終止形終止法）」6例+1例

A' 「対象＋（場所〔ユ・ニ〕）＋見ユ（終止形終止法）」4例

「～ベク見ユ（終止形終止法）」1例

A'' 「対象＋場所（夢・影）〔ニ〕＋見ユ連体形終止法（係り結び）」6例

B 「対象＋場所（夢・面）〔ニ〕＋見ユ連用形＋ツ連体形終止法（係り結び）」2＋2例

B' 「対象＋場所（夢・影・面影）〔ニ〕＋見ユ連用形＋ツツ」3例＋3例

「場所〔ニ〕＋対象（影）＋見ユ連用形＋テ」4例

「対象＋場所（夢・我）〔ニ〕＋見ユ連用形＋コソ」1例＋8例

「対象＋場所（夢）〔ニ〕＋見ユ連用形＋キ（ヤ）」1例＋3例

「対象＋場所（夢・我）〔ニ〕＋見ユ連用形＋ケリ（終止・連体（係り結び）・已然）」
4＋2例

「対象＋場所（夢）〔ニ〕＋見ユ連用形＋来」1例

「対象＋場所（雲居）〔ニ〕＋見ユ連用形＋ヌ（終止）」2例

「場所〔ユ〕＋対象＋見ユ連用形＋ヌ（未然）」＋1例

「対象＋場所（夢）〔ニ〕＋見ユ連用形＋ケム」＋1例

「対象＋場所（夢）〔ニ〕＋見ユ連用形＋反る」＋1例

「場所（夢）〔ニ〕＋見ユ連用形（中止法）＋対象」＋1例

B'' 「副詞（ほのかに）＋見ユ連用形＋テ」1例

「一人称〔ニ〕＋見エ＋助動詞ジ」2例

「二・三人称〔ニ〕＋見エ＋助動詞ジ」1例

C 「場所（そがひに・光に・雲居に）＋見ユル＋対象」9例

D 「対象＋見ユ未然形＋ム」1例

「場所（夢）〔ニ〕＋見ユ未然形＋助詞（バ・ム）」1＋1例

「見ル場所〔ヨリ〕＋見ゆ（終止形終止法）」0例

・〔見え＋〕28＋20例（〔見えず〕（10例）略）

〔見えつつ〕3＋1例（〔家持の歌〕1例）＋2（巻11）＋1（巻14）＝6例

〔見えつる〕2例＋1（巻12）＋1（巻14）＝4例（「影」）

〔見えて〕4例（家持の歌2例）＋1（巻12）＝5例

〔見えきや〕1例＋1（巻11）＋2（巻12）＝4例 B' 4（「夢」）

〔見えこそ〕1例＋1（巻11）＋6（巻12）＋1（巻10）＝9例：（「夢」7、「我」1、
「花」1

〔見え来＋ず〕1例（「夢」）

〔見えけり〕1例＋1（巻11）＋1（巻12）＝3例

〔見えける〕2例

〔見えけれ〕1例

〔見えぬ〕2例

〔見えなば〕1例

〔見えけむ〕1例

〔見え（中止法）〕1例

〔見え反る〕1

（未然形）〔見えむ〕1 家持の歌+1例（第二期から移入）+1（巻12）=2例

（未然形）〔見えじ〕3例、その他1

（未然形）〔見えばこそあらめ〕1例（巻4）

○〔年代未詳〕

・〔見ユ〕3例

A「動詞・助動詞の終止形+見ユ（終止形終止法）」1例

C「場所ニ+副詞+見ユル+対象」1例

J「夢ニシ見ユル（連体形終止法）」1例

・〔所見・見〕13+3例

A「動詞・助動詞の終止形+見ゆ（終止形終止法）」4例（巻7）

B「対象物（モ）+場所（ニ／ノミニ）+見ユ」4例

B'「夢ニシ見ユル（連体形終止法・係り結び）」2例

C「場所（ニ／ユ）+見ユル+対象」1例（巻13）、その他1例

C'「場所（ユ）+場所（ニ）+見ユル+対象」1例

C''「スレバ〜見ユル+対象」1例

K「対象物（サヘ）+見ユル+名詞」1例（巻13）

M（已然形）「夢ニ見ユレドモ」1例

・〔見え〜〕〔見えず〕30例（〔見えず〕（20例）略）

〔見えつつ〕4例〔巻14：1、巻11：2、巻7：1〕

〔見えつ〕1例〔巻13：1〕

〔見えつる〕2例〔巻14：1、巻12：1〕

〔見えて〕1例（12）

〔見えきや〕3例〔巻11：1、巻12：2〕

〔見えこそ〕12例〔巻13：3、巻11：1、巻12：6、巻7：1、巻10：1〕

〔見えなば〕1例（巻11）

〔見えけり〕2例〔巻11：1、巻12：1〕

〔見えけむ〕1例（12）

〔見え（中止法）〕1例（巻11）

〔見え反る〕1例（巻12）

（未然形）〔見えむ〕1例（巻12）

注

- 1 その他7例を略す。
- 2 石垣謙二（1955）は、「一、見ゆ・聞こゆ・思ほゆ（おほゆ）之等の語は、事物の作用を表さずして、其の事物を「見」「聞き」「思ふ」處の主體的存在の判断を表すものであつて、この點意味上形状性用言に入るべきものと考えられる」（二一七頁、傍点は筆者）という。
- 3 「分出」という考えは、時枝誠記（1950）を踏まえた渡辺実（1958a）以降の研究に負う。その基本的な考えは以下の通りである。

主語は述語に対立するものではなくて、述語の中から抽出されたものである。……必要に応じて、述語の中から主語を抽出して表現するのである。」（時枝誠記（1950）p.266.）

客語、補語も述語から抽出された概念であることにおいて主語或は修飾語と同性質のものであり、……（時枝誠記（1950）p.267.）

つまり博士に従えば、主語・客語・補語その他述語をめざす連用成分の素材概念は、述語から分出下ものであり、述語はこれら連用成分の素材概念を再び自身に帰属させる力がある、ということになるのだが、上述の述語の統叙力とは、原理的には自身から分出した連用素材概念を、線条的には受ける関係で自身に帰属させるという、述語独特の構文的機能に他ならないのである。（渡辺実（1958a）p.18.）

一体すべての連用格助詞は、機能的には連用成分の連用展叙を表示するという共通性をもつが、意味的には、述語から分出する連用成分の素材概念と述語との、論理的な関係の種々相を表示するという個別性をもつ。連用格助詞の数は、意識される論理的対述語関係の数に他ならない。（渡辺実（1958a）p.21. 傍点は引用者による）

本稿は、渡辺実（1958a）に言うところの「述語の分出力」を、述語を中心に上下両方向に向けられるものと考え。その根拠は、ここに指摘した、述語に上位する諸成分と述語に下位する諸成分との上下相称的な関係、すなわち呼応関係（阪倉篤義（1966）pp.152-157. 参照）である。

- 4 ちなみに、内田賢徳（1983）は上代語の「見ゆ」について次のように指摘する。「即ち、この「見ゆ」は、状態の視覚的描写に関わる述語の実質性と、かく叙述することへの留保という述語の形式性に両義的である。そしてその両面を統一しているのは、「見ゆ」が見る者に対して述語であることである。見る者は見えるものと情調にあって一体的である。そこで見えるものに被動的になることでそれを内化する主観の働き、そのような述語性をこの「見ゆ」はもつ。状態描写性はその述語の対象面として、助動詞性はその作用面として存する。」（内田（1983）p.14.）
- 5 ここに引用した「人に」を含む例のほかに、「妹に見えきや〔妹等所見寸哉〕」（1996）、「夢に見えきや〔夢所見寸八〕」（0716）、「夢に見えきや〔夢所見也〕」（2812）、「夢に見えきや〔夢所見哉〕」（2874）、「夢に見えきや〔夢所見哉〕」（3111）なども、二・三人

称を主体とする文と考えてよいが、疑問という形式は異なる。

- 6 新編日本古典文学全集『万葉集』一では、その解釈はしなくなるが、訳は「物思いをしているように人に見せまいとわざと平気なよういふるまっていますだけですほんとうは死にそうです。」(新編日本古典文学全集『万葉集』一, p.321.) とある。
- 7 事実、万葉第四期の「動詞・助動詞+『見ゆ』」の形式は擬古的な歌風の現れと見てよいかもしれない。
- 8 その主な研究は、以下のものである。
阪倉篤義 (1953)「歌物語の文章」、『国語国文』第二十二卷第六号
金田一春彦 (1953)「不変化助動詞の本質—主観的表現と客観的表現の別について—」、
『国語国文』第二十二卷第二・三号
渡辺 実 (1953)「叙述と陳述」、『国語学』第十三輯・第十四輯
浅見佐久江 (1957)「助詞の機能のあらはれ方について—相互承接と分類—」、『女子大
国文』第六号
渡辺 実 (1957)「品詞論の諸問題」、『日本文法講座』I、明治書院
渡辺 実 (1958b)「辞の連続—述語をめぐる四要素との関連において—」、『国語学』
第三十三輯
阪倉篤義 (1966)『語構成の研究』、角川書店
ちなみに、阪倉篤義 (1966) は、次のように述べている。
「述語に上位する諸成分もまた、述語にちかいものほど、その概念的な意味とかかは
りあふ詞的なものであり、述語をとほざかるにしたがつて次第に辞的な性格をつよめ
て、この文の表現態度(陳述)にかかはるものとなる。この関係は、さきに見た述語
に下位する要素における場合と、詞をはさんでまさに上下相称的であつて、しかもそ
れらは、みぎに見るごとく、上下呼応しながら、中心にある述語の詞を、幾重にもと
りかこむかたちをなしているのである。」(阪倉篤義 (1966) pp.155.)
- 9 阪倉篤義 (1966) pp.58-107. 参照。これには、「つ・ぬ」は否定の助動詞に続かないこと、
「き・けり」はつねに「き・けり」に後続し、先行することがないなどの事実が考慮さ
れている。
- 10 上代語の「つ・ぬ」が果たして「完了」を表すものかどうかをしばらく不問に付し、
一般的な説に従って「完了」としておく。
- 11 稲岡耕二『万葉表記論』(塙書房:1976)の説に従い、人麻呂歌集を、天武朝における
人麻呂の活動の成果とみる。
- 12 細江逸記 (1932) が「き」を「目睹回想」、「けり」は伝聞回想としたのを踏まえ、拙
著 (2002) は、これを「直接経験・間接経験」とし、指示体系の「知覚指示・観念指示」
と関連づけた。
- 13 未然形は一般に、「未実現の現象に関する表現」(橋本四郎 1959) ないしは「想定され
る一つの事態を表現するもの」(阪倉篤義 (1966) p87.) として考えられる。

- 14 詳論をする紙幅がないが、阪倉篤義（1966）の以下の考えが本稿のよりどころとなる。

いわゆる助動詞として現在一般にみとめられているもののうちには、受身・使役・希望の助動詞など、客体的表現にあずかる、もっとも詞的性格のつよい一類のものを一方の極とし、また、推量・過去の助動詞など、ともに非存在態に対する主体的態度を表明する、もっとも辞的性格のこいものを他方の極として、その中間には、存在・完了・否定の助動詞など、客体的な情態に対応しての主体的態度の表明をなす、いわば詞的と辞的との両性格をもつものが存在する、というような配置が考えられる。（阪倉篤義（1966）pp.71-72.）

- 15 「一人称 vs. 非一人称」は、拙稿（1998）、（2000）、（2001）、（2002）などの用語である。上代語の人称体系は、一人称、二人称、三人称という三項対立ではなく、「一人称」対「非一人称」の対立をなすという考えに基づく。「非一人称」は「二人称」・「三人称」未分化の状態である。

参考文献

- 浅野 信（1958）「『けり』の研究」、『国文学 解釈と教材の研究』第四卷第二号臨時増刊号「古典文法の第一探究・助動詞篇」，pp.61-66.
- 石垣謙二（1942）「作用性用言反撥の法則」、『国語と国文学』昭和十七年五月号，石垣謙二（1955），pp.215-238.
- （1955）『助詞の歴史的研究』，岩波書店．
- 稲岡耕二（1976）『万葉表記論』，塙書房．
- 内田賢徳（1983）「『見る・見ゆ』と『思ふ・思ほゆ』—『万葉集』におけるその相関—」、『万葉』第百十五号，pp.1-32.
- 木下正俊（1957）「『来す』と『越す』」、『万葉』第二十三号，pp.35-50.
- 五味保義（1939）「万葉集詞句考—『見ゆ』の問題—」、『国語国文』第九卷第十二号，pp.39-93.
- 阪倉篤義（1966）『語構成の研究』，角川書店．
- （1969）「『べし』『らし』『らむ』『けむ』について」、『佐伯梅友博士古稀記念国語学論集』，pp.367-380.
- 佐竹昭広（1964）「『見ゆ』の世界」、『国語国文』第三十三卷第九号，pp.1-13.
- （1975）「万葉・古今・新古今」，日本古典文学全集『万葉集』（一）補論，小学館，pp.476-482.
- 竹岡正夫（1963）「助動詞『けり』の本義と機能」、『国文学 言語と文芸』昭和 38 年 11 月号，pp.2-15.
- 塚原鉄雄（1957）「推量の助動詞—その国語史的考察—」、『国語国文』第二十六卷第七号，pp.1-11.
- （1958a）「『めり』の研究」、『国文学 解釈と教材の研究』第四卷第二号臨時増刊号

- 「古典文法の第一探究・助動詞篇」, pp.106-110.
- (1958b)「『らし』の研究」,『国文学 解釈と教材の研究』 第四卷第二号臨時増刊号
「古典文法の第一探究・助動詞篇」, pp.111-115.
- 橋本四郎 (1953)「動詞の終止形一辞書・注釈書を中心とする考察」,『国語国文』 第
二十二卷十二号, pp.1-15.
- (1959)「動詞の未然形」,『女子大国文』 第十五号, pp.77-84.
- 細江逸記 (1932)『動詞時制の研究』, 泰文堂.
- 森重 敏 (1957)「万葉集の『見』」,『万葉』 第二十四号, pp.1-31.
- 山口佳紀 (1976)「動詞活用成立」,『国語と国文学』 昭和五十一年十二月号, pp.48-60.
- (1997)「万葉集における動詞基本形の用法—テンスの観点から—」,『万葉集研究』
第二十一集, 塙書房, pp.297-321.
- 李 長波 (1998)「日本語の指示体系の史的変化について」,『国語国文』 第 67 卷 12 号,
pp.18-38.
- (2000)「『カレ』の語史とその周辺—三人称代名詞が成立するまでのみちすじ—」,
Dynamis, 京都大学大学院人間・環境学研究科文化環境言語基礎論講座, pp.1-33.
- (2001)「古代日本語の人称体系における『自・他』の問題—古代中国語の人称代
名詞と上代語との関連を中心に—」 文部科学省科学研究費補助金特定領域研究 (A)「古典
学の再構築」(平成 10 年度 平成 14 年度)『公暮研究論文集』, pp.427-446.
- (2002)『日本語指示体系の歴史』, 京都大学学術出版会.
- (2011)「上代語の「〜来^く」と「〜行^ゆく」の接辞化とその周辺——事態と事態の実
現の仕方を中心に——」, 影山太郎・沈 力編『中日理論言語学研究の新展開 3・語彙と
意味』, くろしお出版, pp.169-203.
- 渡辺 実 (1953)「叙述と陳述」,『国語学』 第十三・十四輯, pp.20-34.
- (1958a)「修飾法—連体法・連用法の成立の仮説—」,『国語国文』 第二十七卷第五号,
pp.15-37.
- (1958b)「辞の連続—述語をめぐる四要素との関連において—」,『国語学』 第
三十三輯 (1958 年 6 月 30 日発行), pp.79-94.
- (1963)「助動詞はどんな役目をする言葉か」,『国文学解釈と鑑賞』 昭和 38 年 6 月
号特集「古典文法のポイント」, pp.37-43, p.80.
- 和辻哲郎 (1926)「万葉集の歌と古今集の歌との相違について」,『日本精神史研究』, 岩波書店,
pp.107-130.